

平成二十二年六月六日

へはじめに

恒存は、昭和三十九年十月に、読書新聞社と日本文化フォーラムの共催の世界平和推進會議に、日本代表として出席した。基調報告「平和の理念」は、後日、雑誌「自由」十二月號に發表され、昭和四十年八月に新潮社より刊行された。「日本共産黨憲法禮讃」は、初出は昭和四十年二月號の中央公論であるが、堂々たる論文である。「平和の理念」を受け、日本の國家としての現状と、進歩的知識人の欺瞞的態度を批判したものである。「平和の理念」と合わせて讀むと、理解も深まると思われる。この小論も、新潮社版の「平和の理念」に収められてゐる。

へ各章の要点

段落一

・この小論文の對象となつた知識人とは、

・共産黨や共産主義、マルクス主義を、身分證明書の様
形で利用しなかつた、共産黨の「前衛主義」及びその過失と
頑迷とを批判することによつて、今日の曖昧な政治的状況に
適應してゐる。

・赤とか左翼と言はれるのは嫌ふ

・俗流マルクス主義と純正マルクス主義とを分け、批判をかなし、
共産黨をも比較する。

←

居心地の良い中間地帯に住み、進歩的で物分りの
良いといふ知識人の看板を確保し、そのために
純正マルクス主義と護符とする。
(「原則論」)

・後の清水幾太郎批判にもつながる視点である

・現實論だけでごまかして行かうとする日本人の狡す。

・特に社會黨、總評、平和論者に見られる、闘争の
曖昧な姿勢（アベック闘争が見つかされてゐる）

安保闘争の失敗と敵の所在が不明確だった
平和論者の基地闘争

マルクス主義や反米といふ原則をわがと
曖昧にする 戦術

段落二

・反共、新米派である恒存が、日本共産黨に共感する点とは、

①階級闘争のために、首尾一貫する姿勢

平和主義を捨て、ソ連、中共の他人本願路線をとる。

②中ソ論争以来、日共が中國派の立場になったこと

社會黨びいきの中間派知識人は、ソ連の身近な存在
（文化的で自由があると見てゐる）

③日共の相次ぐ追放事件

文學主義を脱し、政治優位をとる

④中共の核実験に抗議しなかった

日本の革命のためには、中共による核の壓力は望ましいとするため
平和論者の論は、ここでも矛盾と危険がある

核の不擴散を言ひ、米國の核の傘もいやがる
絶對平和主義（理想論）を、現實論と心得てゐる

⑤日共は、良識家の公正主義はとらない

國民を惑はせたり、瞞著したりする、迷ひが無い
・原則論的に正しいとされる公正主義といふものは、
最終的目的がはっきり示されないため、結局
原則論的な曖昧さがある

・日本人は國家としての去就・進退をはっきりさせるべきだ

・その判断の基準は二つ

① 國家的利害

② 國際情勢に對する診斷

・道德の問題こそ大事なのだ、政治と道德を混同する様る
暗昧と偽善と思ひ上りとは、一日も早く拂拭すべきだ

・日本人は戦前、戦後、國家惡を直視してゐるか。戦後は折れ
平和憲法の看板の下に、その溫存を計り、ヒト・マシイの名の下に
階級的エゴイズムをこまかし、偽善ぶりが手に負へぬ状態となつた
生活が豊かになるに従ひ、思ひ上がりも加はり、自國のエゴイズムを
自覺し、國家としての去就・進退といふ原則論を明確にする
ことが、避けられることとなる。

・中間派知識人の言動の根柢にある 政治と道德の未分について

・近代國家成立の宿命としての二元的對立と處理ができてない
政治と道德

現實論と原則論

集團的自我と個人的自我

←

俗權と宗權との對立抗爭に揉まれる中かゝ生じたもの
この近代感覺を身につけねばならぬ

・後進的近代國家日本の問題

・近代主義に癒れ、夢想を尽かし易く、全體主義に
郷愁を感じる、政治に道德、その他取り込み
政治優位を確保したがる

・自國の利害を第一に真剣に考へるべきだ

• 政治的現實主義の立場から、米國を盟主とする

自由主義陣營の一員としてほめる事を明らかなすべし、

二つの陣營の、それぞれの内部に働く遠心力と求心力

二つの陣營相互の遠心力と求心力、こうして

物理的運動の二元性も理解すべきである。

• 絶対平和主義か國家主義かの性ある判断を

とりかゝる日本の知識人

• 恒存の自由陣營 選択の理由

二元論的生き方の故であり、

日本と西洋との二元論的生き方にも通じてゐるから、

←

このことを身につけるためには、教育こそが最も大事。

教育のたり方そのものについて、徹底的に検討の必要あり。

今日の評論も二元論的生き方を、日本人も身につけるべきだとの考へか述べられてゐる。日本の政治家が選挙に敗れた際、支持者達に、不徳の致すと云ふと詫かざるのを聞くか、これは政治と道徳が未分の精神構造の表われるのだろうか。

恒常の言ふ通り、今日の日本も、政治に道徳その他、何も彼も取り込み、政治の優位を確保しようとする。それは、後進の近代国家としては、ある程度しかたない面もあると恒常も考へてゐる。だが、大衆を知的にリードすべき知識人のめくか、物質的には、これほど近代化が進んでゐる中、未だに二元論的生き方が身についてゐないといふのは、問題だ。西洋と日本との得我的差、近代化の過程における神の存在の役割の大きさ、恒常の戦後から（費してゐる）評論活動から、評者、めくの示唆を汲み上げようとするのが、言葉としては「二元論といふのは、わかつた氣にすりやすいが、これも意は似せ易く、汝等は似せ難しで、一読してわかつたといふものではないのだらう。たゞさうく、自他未分の神道的生活態度が身についてゐるため、何事にも分離がまず距離を置くことかできる。そんな自分、恒常の評論を読むことで、氣がつくこと、自分も各観視できる様に訓練することか、第一歩かもしれない。日本の戦後、知識人で、恒常ほど、二元論的生き方をしてみせてくれた人はいる。その文書も二元論的生き方が身についてゐるがゆゑ、道徳感、文藝性に裏打ちされてゐて、今日も、しっかりと讀まうとする者には、いつても、その尽まるい魅力を感じさせてくれるのだ。